らに詳しく発表した。

明石海人　日本における誤ったハンセン病の歴史を明石海人なる人物を通して描いている。ハンセン病は長い間伝染病と考えられていた。アルマウエル・ハンセンにより癩菌が発見され、明治三十年の国際会議でハンセン病が伝染性疾患であると確認された。その後も日本政府は誤った解釈の下に、十三の国立癩療養所と、三か所の私立癩療養所にすべてのハンセン病患者を収容した。患者は時には犯罪者のように取り扱われた例もあった。明石海人は二十八歳の時、癩を発病、長島療養所へ送られた。のち癩性角膜炎で失明、ひとり寂しく離れ小島で死んだ。ハンセン病患者の強制隔離などを規定した『らい予防法』を廃止するための法立案が参院本会議で全会一致で可決成立したのは何と平成八年三月二十七日の午後のことであった。

『続・医の名言』には以上のほか、多数の事例が紹介されている。

（大滝　紀雄）

〔中央公論社：〒104-8320東京都中央区京橋二―八―七、電話〇三―三五六三―一四三一、平成十年五月、四六判二二六頁、本体一六〇〇円〕。

青木歳幸著『在村蘭学の研究』

かねて『実学史研究』（実学史研究会・代表末中哲夫）をより所として研究論文の発表を続けて来られた著者が、他の拠点『信濃』や『日蘭学会誌』・『蘭学資料研究会報』・『在村蘭学の展開』（田崎哲郎編）そのほかに寄せられた論文も合わせて、修正・加筆を加えながら集大成された。著者のこれまでの三十年に近い研究活動の成果を一冊に凝縮されたのが本書であろう。

最初に本書のタイトルを知ったとき、第一に「この著者はもしかしたら田崎哲郎教授のお弟子さんでは、愛知大学で学ばれた方では？」と思った。それは少し外れてはいたようだが、田崎教授による三河地方を中心とした一連のライフワークを、信濃地方に移し換えて、その学統を継ぐ研究と拝見した。信濃地方の庶民医療史の実証的研究であるが、換言すれば、少し粗雑すぎる表現かも知れないが、「幕末期信濃地方の草の根蘭学史」とも言えるのではなかろうか。ここで史料収集に傾注された著者の努力は全く敬服のほかはない。もちろん著者は県立歴史館勤務という甚だ有利な立場におられたこともあろうが、本書の強みは何といっても豊富な歴史資料を基盤に、それを縦横に駆使して論考を展開されたことである。

以下に著者自身が本書の「まえがき」に記された各章の概略から要約を試みる。

第一章　在村蘭学の定義、蘭学研究史および在村蘭学研究史の整理、各地の蘭学塾とその門人たちの活動、在村蘭学の浸透につれて各地の医療環境に起った変化の素描。

第二章　各地の蘭学塾門人帳そのほかから信濃の蘭学者を

抄出し、各種活動のデータを集約し、蘭学研究の諸問題を提起。

（第三章から六章では、蘭学発達前史として、医師と医療、村落での医師の社会的経済的地位、庶民の医療観の変遷に留意した考察をする）

第三章　高島領を中心に、近世前・中期の領主的医療の展開、権力による医療独占状況と恩恵的医療政策の展開、京都医界と信濃の医学的距離、権力にとらわれない遍歴医業者（渡り医者）の村落への定着過程など。

第四章　近世中期の豪農の日記（瀬下敬忠『こよみ草』）にみられる在村医の形成過程と地域医療の実態、医師による医療の普及など。

第五章　高島領中心に医師の村方引請、庶民の医療観の変化と在村医の輩出の事情を検討。

第六章　佐久郡春日村の漢方医（伊藤忠岱）と上州吾妻郡横尾村の蘭方医（高野長英の門人高橋景作）との交流、各地の在村医と蘭学の浸透状況。（付録）在村医の蔵書目録と在村知識人のレベル。

（第七章以下では、在村蘭学の地域での展開と医療の近代化の過程をみる）

第七章　松代領上山田村での農民出身蘭方医（宮原良碩）の登場と村落構造の変化、化政期における蘭学の需要とひろがり。

第八章　熊谷珪碩・謙斎父子（江馬春齢の門人、信濃本洗馬村）による信州最初の庶民への牛痘種痘法普及の実態。

第九章　クロロホルム麻酔導入による下肢切断術を行った蘭方医須田経哲（伊那谷出身）の医療活動とその背景。

第十章　蘭方医金子成三（善光寺町）の蘭方薬投与の実態。

第十一章　明治初年の医師開業履歴書を史料として、幕末期在村蘭方医の所在と活動状況を明らかにし、さらに明治初年以降の地域医療近代化に果した役割の実証。

本書はおよそ右のように要約できよう。そして本書には当然といえば当然であろうが、各章毎に豊富な資料・文献が列挙提示され、かつ巻末には人名別（十一頁）事項別（六頁）の索引が付され、甚だ親切な構成になっている。なお、本書は平成九年度文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付を受けられた出版であることを付記する。

一読して、読者はおそらく、従来ややもすれば長崎・京都・江戸に偏重されがちなわが国への蘭方医学の受容が予想外に早く、農山村地帯にも浸透していた実情に驚かれるのではなかろうか。筆者としては、今後このような地域に根ざした研究が各地で推進されることを期待してやまない。

なお、最後に私見ながら、巻末の著者略歴によれば著者は昭和二十三年のお生れとあるから、あるいは著者には心中、五十歳の記念にというお気持ちもあったかも知れない、と筆者は密かに憶測している。

（正橋　剛二）

（思文閣出版：〒606-8203京都市左京区田中関田町二―七、電話〇七五―七五一―一七八一、平成十年二月、A5判、四五四頁、

本体八六〇〇円〕

岩下哲典著

『権力者と江戸のくすり』

医薬行政の根幹に関わるような問題や矛盾が相次いで大きな社会問題となっている今日の事態を考えるとき、そもそもわが国の医薬行政の出発点はいかなるものであったか改めて問いたくなる。

本書は、現代の医薬行政の深刻な問題を、遠く江戸時代にまでさかのぼって考察しようという問題意識を持って、近年の論考を三話にまとめた意欲作である。表題は、内容に比して、やや生硬な感を与えなくもないが、「権力者」とは将軍のほか、ここでは主に尾張藩主を指している。

第一話は、「江戸時代の人参栽培と薬師信仰」として、江戸中期に尾張藩薬園から日光東照宮に人参が献上された謎の解明をテーマとする。吉宗の人参栽培政策による国産人参の安定供給は、庶民の考え方を「吉宗の御深仁」に収斂する効果があったと評価する。日光で栽培された御種人参は尾張藩にも下付される。これは御下屋敷御薬園で栽培され、三村森軒らの努力によって、人参製法が完成する。この尾張御薬園製の人参が吉宗の上覧するところとなり、幕府を通じて日光山にも献上されたのである。この献上の理由と意義を、家康・天海の構築した薬師如来信仰にもとづく支配イデオロギーを補完するための儀式と説き、江戸時代においては、権力と薬と薬園と、そして宗教が非常に離れがたく結び付いていたことを指摘する。

第二話は、「将軍から下賜された国産葡萄酒」として、尾張藩『事蹟録』の正保元（一六四四）年の条にある「日本制之葡萄酒」の記事を取り上げ、国産葡萄酒に関する最古の新出史料として考証し、国産葡萄酒が尾張藩主徳川義直に下賜された意味を問う。甲斐勝沼大善寺の葡萄薬師如来の存在とつなげて、薬酒としての葡萄酒の薬師如来と薬酒と薬園の密接な関係を指摘する。

第三話は、「殿様から下賜された御側の御薬」として、全部で一〇七冊あるという尾張藩『御小納戸日記』の医薬記事に関する、はじめてのまとまった分析・紹介がおこなわれている。尾張藩では、江戸後期になると、藩御薬園で栽培された薬用人参をはじめ中風の薬・烏犀円や狂犬病薬などが藩主の御側に常備されており、藩主よりの御薬として藩士にあたえられ、領民にも疫病の御薬が下賜されることが慣行化していたことが豊富な事例で示される。薬を媒介にした領主と藩士・領民の支配関係を如実に解明している。また、御深井御薬園を管理した御薬園預細井氏の経歴、人となり、家計やその運命などについても考察し、藩御薬園が藩主のきわめてプライベートな空間だったことを指摘している。

本書は、愛知県が大府市内に建設を予定している「愛知県薬草園」の復元展示施設「尾張藩御深井御庭御薬園」に関する調査のために結成された尾張本草学研究会における著者の